

序

私は 妹尾正治、子供の頃は「まあちゃん」と呼ばれていた。今でも兵藤さん（実兄で幼小の時に養子に出された）だけがまだ「まあちゃん」と呼ぶ。

七十一歳と五か月になった今、急に自分の生い立ちを書き残そうと思いついた。

それは記憶が残っている内に書き留めようと思ったのと、今日まで積み上げてきた生き様が、今の自分の形成にどう関わってきたのかを知りたいと思ったからである。

記憶を辿って行けば、七十幾年の歳月の中に、気づかずに身に着いた、人生観（大本信仰）・性格・思想などの原点が見つかるかもしれないと思ひ自分探しに出かけてみる。



出生から幼少まで

昭和二十四年一月二十日、私はとても貧乏な家庭に生まれました、だが兄姉が生まれ落ちた時代に比べ大分暮らしは良くなっていたと、大人になってからよく言われたものだった。

家族構成は、父暁一、母すゑ子、祖父信一、姉克子、長男弘、次男暁夫（三男治實は幼少の時にすえ子の兄の家の養子となる）と自分、末っ子でかわいがられて育ちました。

戦中戦後の混乱期に私達は生まれ、長女長男は名古屋市の鍋谷上野、次男は現愛西市（立田村）四会町、そして私は今も実家が有る津島市大縄町が出生地と聞いています。

父は戦時中満洲へ出兵し、敵の銃弾を腿に受けた為、本土に返されて春日井市鳥居松の軍需工場で働いていました。

そんな時期に母との縁談の話が有って結婚した様です。

終戦直後は母の姉（現在の愛西市四会町）を頼って自宅（当時は借地）で自転車のパンク直して生計を立てていたそうです。

私の記憶に残っている時には父は蟹江町の日本染色機械株式会社

社へ勤めていました。

幼少時代の町内の様子を辿ってみます。

津島市大縄町は一丁目から九丁目までの細長い町です、昔は（明治まで？）木曾川が流れていましたが、川底が浅くなり、馬飼大橋から新しく浚渫しゅんせつして現在の流れに替わっています。

旧木曾川の跡地が細長い大縄町になり、その真ん中を走る様に佐屋川用水が通っていて、子どもの頃の水遊び（魚釣り・水泳）のメッカでした。

幼馴染は一歳年上の向かいの家の横幕恵美ちゃんと少し南へ離れた家の藤松治夫君、同級生の伊藤澄夫君、水谷れい子ちゃん、小学三年の頃に名古屋から引越してきた水谷富吉君と、少し年上のお兄ちゃん達でした。



夏休みの思い出の中で、いまでも笑えるような事件？事故？のお話です。

前記の佐屋川は夏休みの格好の遊び場でした、少し水かさが多い時は橋の欄干（高さ三十ｃｍ程）から飛び込んで水遊びをしていました。

その日は、お兄ちゃん達が自転車で川へ行くというので走って後をつけていきました（私には自転車が有りませんでした、自分の自転車を買ったのは社会人になった十九歳の時）。

橋に近づいた時、前を走って行ったお兄ちゃんが突然消えました。彼は自転車に乗ったまま、欄干に足をかけようとして大きく川の方へ踏み外したようです。

私が走ってたどり着いた時、お兄ちゃんと自転車は川の中でした、溺れる事も怪我をすることもなく、一緒に笑って帰って来ました。今なら大事件だったかもしれない懐かしい思い出です。

子供のころ甘い物が食べたくてもお金がなく、ツバナの根っこ（甘根）を掘ってかじったり、榎まきの実とか棕むくの実を採って食べたり、菜の花の密を吸ったりとサイバイバルな生活をしていたのを含んでも思い出します。

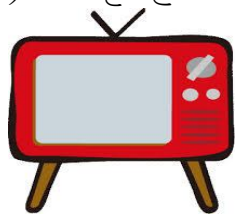
当時は周りの家々も同じでしたから、決して貧乏生活を卑下した

記憶はありません。

電話は向かいの竹屋さん、通称かご屋さん（横幕さん）で借りていました、先方から電話がかかって来ると気安く呼んでくれました。

ある日、勝手に上がり込んで、座卓の上に有ったお饅頭を食べてしまった事があり、幼少時代の恥ずかしい記憶が今でも鮮明に甦ります。

テレビは斜向かいの河野さん（証券会社の重役さん）で大縄町の一番大金持ち）の家で見させて戴きました。



冬の寒い日、家の人がコタツに入って見ているテレビを、私達は冷たい板の間の廊下で硝子戸越しに見ていました。

今思うとチャンネルを選ぶ事も出来ず、又子供ながらに遠慮がちにして、よそ様の家上がるほど、テレビに飢えていた事を思い出すと目頭が潤みます。

祖父信一さんのお父さん（祖祖父）は島根県斐川郡の大きな庄屋さんで村長もしていたそうです。

そんな大家の長男に生まれた祖父は一度も仕事に就いたことが無く、農地を切り売りしての生活を続けていたそうです。

戦後の農地解放でほとんど農地は残りませんでした、又奥さんが若くして病気で亡くなり生きるハリが無くなったのかもしれない、祖母が亡くなったのは父が十二歳の頃と聞いています。

父は結婚を機に島根県から祖父を大縄町に呼び寄せましたが、知り合いも無くさみしい生活を祖父は強いられたと思います。

普段から薄汚れた着物を引きずっていたので孫からも避けられ抜けない島根弁を笑われたりして、私だけが傍にいていつもかわいそうだと思っていました。

だから私は他の兄弟と違って、祖父からもかわいがられて、肌身離さず身に着けていた汚れた布袋の中の飴玉をもらって喜んでいました。

その祖父は私が中学二年の時に老衰で亡くなりました。

少年期

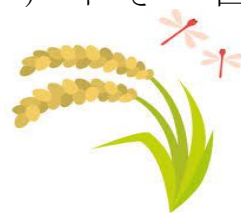
小学校へ上がる前の四歳〜六歳の頃は行動範囲も狭く、向かいのかご屋さん（横幕さん）の恵美ちゃんや、れい子ちゃんとままごと・おはじきなどで遊んでいました。

恵美ちゃんのお兄ちゃん（ヨッチャカさん）（だいぶ後で義勝さんだと知りました）たちとヤンマ（トンボの大きい種類）を追っかけたりしていました。

最初の一匹はトンボの目の前でグルグルと指を回し、目まいをさせて捕まえました。

そして頭と胴体の間を逃げない程度に糸で縛りそれを竹竿に付けて円を描くように回して「ヤンマーぎし来ー・ヤンマーぎし来ー」と意味も分からず声を張り上げ他のヤンマを呼び寄せていました。

その掛け声の「ぎし」は「だけ」という意味の名古屋弁でした。秋の稲穂の黄金色と赤々とした夕焼けの空に出会うとその頃の切ない郷愁にかられます。



私は子供の頃から草花に興味を持っていました。花が好きになるきっかけを作ってくれたのは同じ年の伊藤澄夫くんで、彼は中学生の時からタキイ種苗の会員になっていて色々な草花を育てていました。

彼からタキイ種苗の通販カタログを見せてもらった途端、その魅力に引き込まれ、早速水仙の球根を十種類ほど購入して植えました。

以降、私の花好きは多趣味の内の一つとなりました。

当時はそんなに小遣いは貰えなかったのでカタログで夢を膨らませ花の名前を自然に覚えて行きました。

この年になった今でも夫婦でどこかへ行こうと云えば園芸店が定番になっています。

少し少年期の遊びを紹介します。

当時は学年が上のお兄ちゃん（藤松治夫君）が仕切っていました、三角野球・四面テニス・缶けり・チャンバラごっこ、天気が悪いと近くの氏神さんの拝殿でしゅうや（メンコ）・ビー玉遊びなど

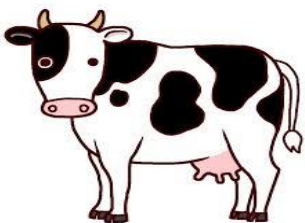
日替わりメニューで暗くなるまで遊びほうけていました。一度怖い想いをしたことが有ります、いつもの様に友達とレンゲ田でチャンバラごっこをして遊んだ後、家に帰ろうとした時でした。

帰り道の畔道を二頭の乳牛が紐を引きずりながら速足でこちらへ歩いてきます。

牛を連れて歩くオジサンはいません、つないでいた杭が抜けた様で、子供ながらに「走って逃げると却って追いかけて来る」と思い、みんな一斉に口をつむり家路と反対の方向へ速足で離れ、交差する最初の畦道を曲がって牛の様子をうかがいました。

牛は同じ步調で真っ直ぐ歩いて来ましたが追いかけて来る様子は無く、無事に家に帰れました、小学生の子供にとっては忘れられない怖い体験でした。夏、ただ映画（無料）が氏神さんの境内で行われる

時は、畑から失敬してきたブドウを食べながら、スクリーンの裏



から見た事が懐かしく思い出されます。

上映された映画は「森の石松」だったと思います。

ただ映画は子供にとって一大イベントだったのです。

夏休みは魚釣りに川へ出かけ、夕立に遭えばハスの葉を頭に乗せて傘代わりにしていました、そんな自然の中でのびのびと体も心も育まれて行きました。

町内には知恵遅れの「ヒロコちゃん」がいました、年齢は三十歳位？いつも裸足で着物を着て真黒な顔をして町内を歩いています。

温厚な性格で知能は七、八歳程度だったと思います、彼女は何故か家の前に来ると「まーちゃん あそぼー」と声を掛けて来ます。汚くて、体は大きく、七、八歳の私にとってはどうして良いか分かりません。家の奥から「まーちゃん 遊んだりやー」とおふくろの声に押され渋々外へ出ました。

何をして遊ぶのでもなく、少し一緒に歩いただけでしたが、彼女はとても嬉しそうな顔をしていました。

ある日町内で大騒動が起きました、「ヒロコちゃん」が出かけたまま帰ってこないから探してほしいと家の人から言われました。

「川にはまったのでは」「どこかで事件に遭ったのでは」と町内の人々は仕事も中途にして探し回りました。



夕方近くだったと思います「ニギロほど西の木曾川近くで見つけた」と、連絡が有り彼女は帰る事が出来ました。

無事で良かったと子供心に安堵した事を覚えています。

その事件後は町内で見かけることも無くなり、ふと思いついた頃には亡くなっていたと聞きました。

「ヒロコちゃん」にとつてあの頃の私はどの様に心に写っていたのでしょうか、あの時素直に遊んであげた事が切ない郷愁となつて想い出されず。

そんな少年時代、父暁一さんは私を自転車の後ろに乗せて、遠くは鍋田干拓までよく魚釣りに連れていってくれました。

伊勢湾台風

昭和三十四年 私が小学校五年生の九月二十六日、大きな被害をもたらした伊勢湾台風が直撃しました。

今までは毎年訪れる台風を、不安と少しワクワクした気持ちで接近を待っていました。

でも今回は不安を通り越し、恐怖を感じさせる巨大な台風の上陸だったので、明け方近くに通り過ぎるまでは一睡もできませんでした。

当時はおんぼろな小屋に毛が生えた様な家でしたので、強風に家ごと持っていかれる様な「ビュービュー」「ゴウゴウ」という風の音と時々「ミシミシ」雨戸をしならせる音が二、三時間続きました。

その頃、夜間高校生だった兄の暁夫さんは名古屋へ務めていて、仕事帰りの津島駅で缶詰めになっていました。

両親と残った兄弟で南に面した雨戸を必死で押さえつけていました。

突然母が「天津祝詞」を唱え始めた時、押さえつけていた雨戸が打ち破られ、『このままでは屋根が持つていかれる』と父は北の戸を開け放ちました。

屋根は大丈夫でしたが、強風と雨が家を通り抜けていました。風が収まった頃、暁夫さんは『怖かった』と言って帰って来ました。

前述の通り、家は旧木曾川の真ん中の高台だったので水には浸かりませんでした。が、堤防下の津島市内は広範囲に浸水していました。

田んぼには弥富から流されて来た金魚が泳いでいて、小学校からの通達で、捕まえた金魚は学校の池で保護し、生産者さんにかえしました。

五千九十八人も犠牲者が出た悲惨な台風でしたが、身内に一人の犠牲も無かったことを有り難く思いました。



初恋

あれが初恋だったと鮮明に思い出すことが有ります。

私は（兄弟全員）幼稚園に行っていないので、小学一年生の入学が人生の大きな節目の様に感じていました。

初めて親から離れ、知らない大人の人（先生）に教わることに緊張と不安と期待が入り混じり、一人ドキドキしていました。

日置千鶴子先生は、若くて優しくて綺麗な女の先生でした、担任と分かった途端、先ほどまでの鼓動が、初恋の鼓動に変わって行きました。

二年間で担任が替わりましたが、中学一年の時に千鶴子先生に年賀状を出したことを覚えています。

その頃までが私にとってほろ苦い初恋の女性だったと、懐かしく思い出します。



青年期の一

天王中学校を卒業して隣接する県立津島高校へ進学しましたが、自動的に小学校から中学へ上がるのと同じ感覚で、特別な感動は有りませんでした。

中学時代と同じ通学路を二百メートル程余分に歩くだけで津島高校に着きます。

校風はとてものどかで、人生の内では一番のびのびとした時間を味わいました。



丸暗記して点数を取る、国語・社会・英語は大の苦手でしたその反面、数学・理科は頭の中で色々と組み合わせる答えを出すのが楽しくて特得科目でした。

そんな頃、暁一さんが二眼レフカメラを買ってきました。興味深々、こっそり持ち出して風景を覗いていました。

レンズを通して見る世界はまるで別世界のように見え、その後顕微鏡、望遠鏡へとレンズの向こうの世界に、興味はとどまる事が有りませんでした。

高校を卒業して進学を試みましたが、見事受験に失敗して一年間浪人生活を送ることになりました。金銭的余裕が無かったので独学で再受験しましたが、結果を見るまでもなく社会人になることになりました。

趣味の写真が生かせる仕事として名古屋市西区押切町の、カラー印刷の版を作る「日本プロセス」株式会社に入社しました。

その頃父はプレス機械を四台購入して次男と共に「妹尾工業」を立ち上げていました。

半年ほど経った頃、父は仕事の事故で指を失いました。

私は父の怪我を口実に、勤め先を退社して家業を手伝う事になりましたが、業績は振るわず私は二十歳を迎えても小遣い程度の給料しか貰えませんでした。

そんな中で、写真クラブ「写友サン」を名古屋で結成し、撮影会の企画、運営、年配の方々との付き合い方などの社会勉強もさせて頂きました。

その頃、家は大本名古屋分苑津島会合所として、多くの人が出入

りしていました。
信徒の横山はつるさんが、よく訪ねて来られ、父母と神様のお話などをされてきました。
まだ信仰心が芽生えていない時でしたが、信徒間の絆の様なものを感じていました。

青年期の二

前述の様に、カメラを趣味としていた私は写真クラブの仲間と京都嵯峨野の寺などへ出かけました。

静寂な空間に身を置くことで、喧噪の世界を離れた時空を心地よく感じていました。

なんとなく信仰の世界に違和感がなくなっていた時期かもしれません。

二十二歳の時に会合所が津島支部になり、暁一さんが支部長として神の家を守っていました。



運転免許が無い父は私を運転手としてよく信徒宅の月次祭・霊祭などに出掛けていましたが、それが嫌だと感じたことは有りませんでした。

支部の月次祭も自然と参拝をする様になっていました。

父は出口京太郎先生の講演会が名古屋市公会堂で催されると、一人で名鉄バスをチャーターして町内の人を案内するなど、そのさまざまな行動力は今でも記憶に残っています。

プレスから慣れない製缶の仕事に変わり、将来に不安を感じ始めていた頃、父が肺ガンと診断されました。

長男弘が日本染色機械株式会社を退社して母方の甥にあたる伊藤勝さん（製缶の熟練工）に入社して頂き、有限会社妹尾工業とし、本格的にステンレス加工を始めました。

私は製缶・溶接工として、製缶は伊藤さん、溶接は日本染色機械の技術者から教えて頂き、五十年という長い年月の生業となりました。

結婚

初めてのお見合いは二十五歳の時、次男暁夫さんの麻雀友達、巽さんの奥さんの妹、原田美代子さんでした。

会場は津島市の喫茶店「泉園」で行われ、二人だけにされても、何処へ行くのか、どんな会話をしているのか見当も取れず、頭が真っ白な一日でした。



彼女は長唄、フラメンコ、生け花などの習い事をしており、自分の気な性格に比べ憧れの存在に思えました。

又、二十五歳には見えない大人の女性の雰囲気は素敵でした。しばらくして、お断りの連絡が有り「良い子だったのに残念」と、とてもショックでした。

後から聞いた話によると「すごく暗い人」と云うイメージだったそうです（美代子談）

妹尾工業に勤め初めて六年程経ち、給料もそこそことなり、年齢

も二十六になって、周りが私の結婚を考え始めました。

そのきっかけは、父が大縄町三丁目に私名義で八十一坪の土地を購入し、名古屋の古家を購入解体し、再建築した事です。

（数年前、同じ様に兄の住まいも土地の購入・古家の再建築をしていました父の行動力は誰一人受け継ぐことは出来ません）

家は「垣見建築」さんが施工してくれました、当時の家は土壁作りで、少しでも安く建つ様に壁の竹編み、壁土こね、壁土や瓦などの運搬を垣見さんのお父さん（ひよかたさん）と一緒にしました。

その垣見さんのお父さんが、家が完成した直後からお見合いの話から次に持ってきました。

最初は立田村の木曾川近くの農家の娘さんの家でした、洋裁が得意でボディーまで置いて有った事を覚えています。

とても家庭的な娘さんでしたが容姿が少し・・・でお断りしました。

一週間もしない内に次の話を持って来ました、今度は立田村森川

の農家で、三人姉妹の末っ子さんでした。容姿は端正な顔立ち、美人でおとなしく、こちらから断る様な点は有りません。

話はトントン拍子に進み、お見合いから二カ月程で、秋の結納、春四月の結婚式が決まってしまいました。

結納の調度品も揃い、このまま順調に進めば来年の春には所帯持ちになるというのに、何か心の中に霞の様なものが掛かっていました。

それは原田美代子と云う、自分の中では本命に当たる彼女の存在でした。

近々結納を交そうとしている女性は、特別欠点はないものの男性慣れしてなくて(三姉妹だからか?)デートの時にも何が食べたい、何処へ行きたいと、彼女からは何も言ってくれませんが、毎回こちらが全ての御膳立てをしないとイケない事に疲れ始めていたのも心に掛かる霞の一つでした。

結納の日の二日ほど前だったと思います、仲人さん(垣見さん)を通じて彼女のお婆さんが亡くなり、結納の延期の連絡がありました。

今思い起こしてもすごく勇気いる事でしたが「一度今回の話を白紙にして、自分の本心を確かめたい」と全て(結納・結婚式)を取り止めて頂きました。

それ以降垣見さんからお見合いの話が無かったのは当然のことです。

しばらくして、美代子さんも結婚していないと云うことで、お見合いが復活する事になりました。

勿論私の方には全く異存は有りませんが、家も有り、結納品も揃っています。

明くる年の一月後半に私の家で二度目のお見合いをする事になりましたが、お互いに顔も知っているし多少の気心も分かっていたので彼女の返事次第でした。

OKをもらってからは、新幹線並みの速さで段取りが進みました。



結婚式場は予約していた場所と同じ津島神社の式場、日取りは前
回予約していた四月より、ひと月以上も早い三月十日。

式場の人も、結婚式の招待状を受けた友人も相手が変わっている
ことに驚いていました、でも一番ビックリしていたのは私だった
かも知れません。

二度目のお見合いから五十日足らずでゴールイン、あれから四十
四年経った今もお互いにこれで良かったと思える毎日をお過ごし
ています。

三姉妹

姉一人兄二人と私の四人兄弟の家庭はどちらかと云えば男子系
の色合いがプンプンしていました。

そのせいか、子供の頃から女性へのあこがれが強く、又女性には
優しくするもの、守ってあげるものと思っていました(今でも)。

名古屋の叔父さん(母の弟)の子供さんは三人とも女性でした。
子供の頃はよく行き来していて、女子系の家庭の丸みのある温か

い雰囲気ですごく新鮮に感じていました。

十八歳の時、NHKの大河ドラマ「三姉妹」が放映され(長女・
岡田茉莉子 次女・藤村志保 三女・栗原小巻)三女の「雪」に
とても惹かれていました。

結婚一年目に「一姫二太郎」の格言通り、一人目は女の子が生ま
れました。

二人目は、周りの人からも絶対に男の子と太
鼓判を押されていたのに女の子が生まれ、三
人目こそ男の子と思っていたら、また女の子
でした。

結局は、子供の頃そして青年時代にあこがれ
ていた三姉妹の家庭が現実のものとなりま
した、目出度し、めでたし・・・



病氣

今は、体力に自信が無くなりましたが、今までに長く床に臥すような大病を患った事は有りません。

子供の頃は病弱で、よく熱を出しては立田村の谷本医院でおしりにペニシリン注射をうってもらっていました。

熱が出る原因は扁桃腺の腫れからで、小学高学年の頃、父に連れられ加藤耳鼻咽喉科で削除手術を受けました。

診察だけのつもりで父に連れて行ってもらったのですが、いきなりバリカンみたいな器具を口いっぱいに入れられ、ガチャっといったら手術は終わっていました。

血が止まるまでベッドに寝ていて、又父の自転車の後ろにまたがり家に帰りました、手術といったらそれが最初で最後です。

四十五歳の時、入院が一回だけ有ります、【C型肝炎】それが我が人生の最大の病氣でした。

会社の健康診断で肝臓障害をよく指摘されていて、一般の肝臓治療を始めましたが肝臓の数値はなかなか下がりません。

医者から、このまま放っておくと肝硬変から肝臓ガンになって死ぬよと常々から脅され続け、徹底的に治療してみようと云う気持ちになりました。

当時、C型肝炎の治療薬「インターフェロン」が保険適用になったばかりで、その意味からもお医者さんが治療を勧めたのだと思います（ほぼモルモット）

C型肝炎ウイルスが活動状態でないとインターフェロン治療が出来ないので海南病院で検査を受け活動期なら一週間入院して注射を打つことになります。

治療に移行する前に肝生検をする事となり、初日に病室のベッドで腹這いになりました。

「少し痛いよ」の言葉の直後に激痛が走りました。

注射針で肝臓の細胞を採る為、背中から肝臓に届くまで麻酔と畳針ほどの注射針が交互に三回ほど行われました。

自分では注射針が体を貫通した位に感じましたが「終わりました」と云う言葉に緊張感から安堵感に心地よく変って行きました。

保健治療に適合していたので、二日目からインターフェロンの注射が始まりました。

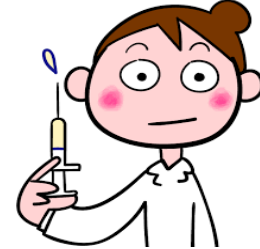
『二日に一回の注射だけ』と、たかを括っていたのですが後から襲って来る症状は並大抵のものでは有りませんでした。注射のあと三時間程すると、歯がかみ合わないほどの悪寒に襲われます、冷や汗は下着が濡れるほど全身から溢れます。

布団をかぶっても時間が過ぎるまでは悪寒は収まりません、その時は四十度程の発熱でした。

海南病院で三回インターフェロン注射を受け、退院した後も月水金の週三回の注射を約一年続けることになりました。

注射の日は五時に仕事を終え、五時半にはインターフェロンの注射をしていました。

帰宅後は急いで夕食、入浴を済ませ九時には布団の中で四十度の発熱に耐え、十一時頃に汗でびっしりの下着を替え、明けて朝六時半には起床して出勤・・・



副作用による発熱、うつ病、脱毛と戦いながら一年続けた結果は失敗に終わりました。

インターフェロン治療の後も一般の肝臓治療を続けましたが、結局C型肝炎ウイルスの数値は元に戻ってしまいました。

一年半程して、今度はペグインターフェロン治療が保険対象になりました。

このペグインターフェロンは副作用も少なく体へのダメージも少ないと云われていました。

問題なのはお金です、前回でも百万円ほど治療に使いました、又今回の治療にも同程度かかります。

妻に相談して、「これで治るのなら」と再度挑戦することになりました。

お医者さんに頼みこんで（本来は大きな病院で検査と一週間の治療）最初から通院治療を始めました。

今回は、週一回の注射と毎朝晩二回の「リバビリン」服薬を十ヶ月続けます。

ボクシングに例えると、前回の治療はストレートパンチ、今回はボディーブロー云とえます。

高熱は出ませんが、少しずつ食欲が減退して行きました。

治療中盤の夏になると、ただでさえ暑さで食欲が湧かないのに、ペグインターフェロンの副作用が加わり、ついに処方箋による流動食になってしまいました。

秋も過ぎ十ヶ月の治療がやっと終わって、月一回の血液検査が続きます、三カ月後、半年後、一年過ぎてもC型ウイルスはゼロ……めでたく完治致しました。

延べ四年に亘る治療で無事完治出来たのも、神様と妻 美代子さんのお蔭だと感謝しています。

仕事も一度も休むことなく、家計が行き詰ったこともなく、又家庭が不穏になることもないお蔭いっぱいの治療期間でした。

※兄の暁夫さんも同じC型肝炎で、ペグインターフェロン治療をしました。が、副作用に負けて半年で中断し、肝臓ガンで亡くなりました。

パソコン

現在では小学校でもパソコン教室が有りますが、私のパソコンデビューは二十歳の頃だったと思います。

パソコンと云っても今の様に大容量・種々のソフトが有るわけではなく、ワープロとゲーム程度の使い道でした。

時代が進み、仕事（板金の展開など）にもパソコンが必須となっ ていきました。

独学で多少は使いこなしていましたが、六十二歳の定年を迎え転職が訪れました。

定年と同時に年金をもらい収入は減るものの、なんとか暮らしは成り立っていましたが、時間の流れが極端に緩やかになり、それだけが苦痛になってきました。

妹尾の苗字のルーツを探しに岡山のJR妹尾駅へ温泉旅行を兼ねて訪ねてみたり、職安へ通ってパート職を探したりして時間をつぶす日々を送っていました。

三回目の職安での面談で、貯蓄・財産などの限度がクリアーでき

れば技術を習得しながらお金がもらえる制度が有ると案内されました。

その中にパソコンインストラクター養成のコースが有り早速申し込みの手続きをしました。

資格が取れ、お金が頂け、時間がつぶせる、まさに絵にかいた様な一石三鳥です。

五月から始まる六ヶ月コースを選択して最初の五ヶ月は名古屋駅前教室で各種（ワード・エクセル・パワーポイント・アクセス・ネット・メール）のスキルを習得し残りの一ヶ月を一宮のパソコン教室で先生の助手としてインストラクターをしました。

パソコン教室と云ってもほとんどの人が給付金目当てで、インストラクターを目指す人は希少です。

八月に入っても長袖で通う人は全身に入れ墨が有ったり、授業をネットで時間をつぶす人、職業を転々と替え給付金で生活する人など、世の中の底の世界に飛び込んだ様に感じていました。

大本津島支部長

大本津島支部は昭和四十六年六月十五日に発足し、初代支部長は妹尾暁一（昭和四十六年六月十五日～昭和五十八年九月）、二代目が母妹尾すゑ子（～平成十年六月）でした。

平成十六年四月の支部大祭の日だったと思います「高齢（当時八十四歳）になったので今季で支部長を辞任する」旨の申し出がありました。

支部の皆さんと協議しても中々後任の支部長は決まりませんでした。

一時は支部の大神様を返納して、それぞれ他の支部や分苑直属に編入させて頂く話まで有りました。

妻が言うには、支部長改選の期限が近づくと私の顔つきが変わって行ったと言います。

多分、私の心の中には両親が築いて来た支部の歴史と時間をここで止めてはいけないという気持ちがあったからだと思います。

妻に負担をかけてはいけない、でも支部は存続したい。

葛藤の末、経験も自信もないまま、妻の承諾を得て三代目の支部長に就任させて頂きました。私が五十一歳の時でした。

支部長を受けた以上は、参拝者の数が減る様なことではいけない、皆さんと仲良く楽しく信仰を続けて行かなくてはいけないと、年一回の親睦会を企画したり、設立四十周年の記念大祭を催行して皆さんと絆を深めて来ました。

今は、来年六月の支部設立五十周年の記念大祭を控え、支部の皆さんと協議しながら記念すべき大祭が盛大に執行出来るように頑張っています。



大本名古屋分苑長

支部長になるまでは津島支部の中だけでの信仰で、名古屋分苑へは用事を頼まれる以外は月次祭にも参拝していませんでした。

元来「受けた以上は全うする」と云う信念が有ったので、以降は分苑の祭典の参拝を欠かしたことは有りません。

次第に皆さんにも顔を覚えて頂き、支部長二期目になった時石原分苑長から参事に推薦する話が有りました。

元来「私の辞書にはNOは無い」と云う信念も有ったので、総務部の担当をお受けしました。

三期目には堀分苑長から引き続き参事の推薦を頂き又 YES。四期目は、宣伝部担当の参事・次長の推薦を受けました。

五期目の時、堀分苑長が任期を終えられ、私に分苑長推薦の話が分苑総代から持ち上がりました。

いくら「私の辞書にはNOは無い」と云ってもさすが分苑長の様な大役に簡単にYESとは言えません。

分苑創立五十周年に併せての「神の家」の建設時期が迫っていま

したし、建設となれば教主様の御親教も有る・大きなプレシャーの中でいつの間にかYESを出してしまいました。

「神の家」の着工は就任二年目の春でした、そして年末に完成。翌年の完成奉告祭の折に教主様のご親教を頂き無事に三年の任期を終える事が出来ました。

やり切った後の精魂疲れ果てている私に「大きな事業は済んだからもう一期分苑長を！」と総代会から推薦されました。

名古屋分苑には「分苑長は二期務めるもの」と云った暗黙のしきりがありました。

もう大きな事業は起きないと、大きな思い違いをしたままお受けしました。

明けて春、突然分苑の真向いの土地が売却される話が舞い込んで来ました。

「神の家」建設で思わぬ予算オーバーになり、皆様に二次献金をお願いしている真ただ中の事です。

駐車場として「手に入れたいけど手が出ない」又頭を悩ませます。不動産会社の人が、「お宅に一番に話を持って来ました」「訳有り物件なので金額は相談に乗れます」と盛んに勧めます。参事会で協議して、「こちらの希望金額まで

売値が下がったら話を進めることになりました。

と云っても又本部の融資のお願い、信徒の皆さんにも再度頭を下げないといけないなど、またまた難題が一杯です。

結局、「こちらの希望価格通りになり皆さんからの献金も沢山頂き本部の融資を合わせて土地を購入する事が出来ました。

地均しとか、ダンプで碎石を運ぶご奉仕を戴いたり、皆で碎石を均し、ギリギリでしたが、その年の秋季大

祭前日に、駐車場として完備する事が出来ました。分苑信徒の皆様熱い絆を心強く感じました。



その後、名古屋分苑の主催で「東海サミット」を春日井市の勤労会館で開催したり、分苑長任期最後に東海教区主催の「お作品展」を名古屋市中村区の「ノリタケの森」で開催したり、毎年何かの行事が続いた三年間でした。

そして、二期六年に亘る分苑長職を無事に終える事が出来ました。追伸

機会があれば、大本信仰を主にした叙述を書き残してみたいと思いましたが、今はまだ現在進行形の状態ですので、もう少し枯れるのを待ってみようと思います。



私の原点

色々と思いつくままに書き留めた文章を読み返すと、何かが少し見え始めた様な気がします。

幼少の時の「優しく接する心」病気では「折れない心」結婚では「秘めた勇氣」分苑長時代の「挑戦する力」などなど。

結局今の自分は、本来誰にも与えられ持っている宝を神様が掘り起こして下さっただけの事でした。

そして神様は私に、乗り越えることが出来る試練と機会と力を与えて下さり、感謝でいっぱい的人生です。

最後になりましたが、七十幾年の間、私の周りでそつと優しく手を差し伸べて下さった皆々様に心の底から感謝申し上げ筆を置きます。

完